富士山

万里小路通房

ますらをのたけき心にたゝへまし
不二の高根の高き姿は

諏訪忠元

新高のやま高けれとかたちよき
不二には遠く及ばざりけり

相澤求

動なき國のすがたにあらはして
雲ゐにたかき不二の大嶽

上眞行

強力の助もからでいさましの
西のをみな子不二登りする

白雲を八重ふみさくみのぼりこし
不二の高根に天つ風ふく

山崎房吉

富士のねの高嶺にたちて夏の夜の
さやけき月の影仰くかな

澤弐

天雲の雷の上に神さびて
そゝりたゝせり不二の神山

龜山新一

ふじの根にのぼり見れとも大空は
もとのまゝなる大空にして

諏訪頼國

朝まだき晴れし雲間に聳出て
さやかに見ゆる不二の神山

又原保行

心をも身をもかゝれと思ふかな
雲より高きふじのしばやま

水野清名

雲にかはり雨にかはりて不二のねは

石搏千亦

見るがうちにも姿かはり行く
湯川貫一

天雲もいゆきはゝかるふじがねは
山の位のたかきなりけり
松寺久雄

海を拔く一万尺の上ゆ見れば
人の住むあたり雲たち迷ふ
樺山常子

契りにし友は病のいえやらで
我ひとりのぼる富士詣かな
板倉止子

水無月の暑さにいつか雪消えて
あらはになりしふじの姿も
板倉藤子

青たゝみしけるが如き海原に
しろくもうつる富士の大嶽
松平岳子

いひしらぬ富士の高根を朝夕に
打仰くべきわがやどもがな
頭本春子

かよわなる女なりともひとたびは
のぼりみまほし富士の神山
大竹いせ子

ならひなき國のみいつも仰ぐかな
かけずくづれず不二の神山
小林茂子

息杖に岩ふみならし修業者の
足なみ早くみ山のぼり行く
有賀晴子

一なつを暮さまほしき浦わかな
磯松青し遠ふじのやま
關屋愛子

女われのぼらん望思ひたつ
ふもとに仰く富士のかみ山
藤平雪子

天つ少女まそでふりけんそのかみの
かたみぞのこる不二の白雪
慶野華子

男の子ならば登りみましを足元に
雲のわくてふ不二の神山

中村文子

清見がた清き濱邊にさまよひて
　あかず眺むる富士の神山

折にふれて

東　くめ子

家にまつ妻に見よとて束ねこし
　心も色もふかきすみれよ

紅染のうぶきぬはんと手にとれば
　まだみぬ稚兒のおもかけにたつ

ピアノ彈く君が手の上にこぼれくる
　瓶の櫻はこゝろあるらし

山吹のまばゆき色にあくがれて
　道ならぬ道に迷ふ世の人

波と見ん雲さへたゝぬ空の海に
　むらがりのぼるのぼり鯉かな

自轉車三首

ひむかし

さくら咲く木の下蔭を君とわれ
　自轉車驅りていそぎゆくかな

風を切りて乘り行く我を賤の子らが
　早いなあと許りあきれ見る哉

いそぎ行く櫻ばやしに風起り
　鬚髮そよぎて落花顏をうつ

月のかげ

つねを

やへも一と重も　葉になつて
みどりいろ〳〵　しげりゆく
さくらはやしの　ほとゝぎす
旅ねさびしき　夕ぐれを

いづこに行くか　ひと聲の
夘のはなづく夜　さやかにも
名のるはつ音の　いとけなく
軒ばいぶせき　さみだれの

ふり來しさとの　なつかしく
なみだは見えね　人知らね